

ことを目指して組織された地域教育推進ネットワーク東京都協議会(※)と東京都教育委員会の主催で行われました。

フォーラムには、地域で放課後子供教室のコーディネーターなどを担われている方々、学校支援ボランティア推進協議会事業(学校支援地域本部事業)においてコーディネーターやボランティアをされている方々、青少年委員、民生・児童委員、学校運営協議会委員など、地域において多様な形で子供た

ちの教育支援を担われている方々のほか、学校支援などに積極的に取り組んでいる企業やNPOのスタッフなど、約300名を越える方々の参加がありました。

(※)都教育委員会は、子供たちの教育活動に、企業・NPO・大学等の専門的な教育力を効果的に導入するためのネットワークづくりを目指した組織として、平成17年8月、「地域教育推進ネットワーク東京都協議会」を設立しました。

## FORUM

### 第一部

#### 事例報告

#### 「多様な地域のアクターがつながり活かしあう！」

第一部は、「地域教育推進ネットワーク東京都協議会」の会員による事例報告です。

まずはじめは、NPOが都立高校を支援した事例です。都立世田谷総合高等学校は、今年度開校に向けて、昨年度より、都立学校教育支援コーディネーター(以下、「教育支援コーディネーター」という)のNPO法人じぶん未来クラブに支援を依頼し、準備を進めてきました。学校が教育支援コーディネーターを必要とした点は、①開校初年度のための先輩の不在、②科目選択の充実、③外部からの柔軟な発想の導入等の理由からです。

NPO法人じぶん未来クラブは、NPO法人カタリバのプログラムを取り入れながら、年間を通してカリキュラムづくりを支援しました。8割以上の生徒がそのカリキュラムを評価しており、「自分のやりたいことが増えた」「いろいろな科目について知りたくなった」などの感想がでています。

ほかにも、東京学芸大学子ども未来プロジェクトからは、大学がその専門的教育機能を活かして、地域で教育支援活

動を行う人材を養成する試みや、三菱自動車工業株式会社が3年前から社会貢献活動として行っている「体験授業プログラム」における小学校の授業支援の活動報告もされました。

「地域力が子供たちを育成する」と題された板橋区の自治会「志村親和会」の事例では、地域の様々な機関・団体が連携して、防災学習訓練を行う中で、地域の一員である中学生も、「助ける側」として障害のある人の避難を支援する訓練を行うという活動です。志村親和会の会長は、「テーマをもってみんなが集まることが地域力になっている」との言葉が印象的な報告でした。

NPOや企業は、専門的な知識・技術を活かし、地域は地縁を活かして、それぞれの教育力を発揮し、まさに社会全体で子供たちの豊かな“体験”と“学び”の場を支援している——バラエティに富んだ団体からの報告に地域の教育力の手ごたえが感じられました。

## FORUM

### 第二部

#### パネルディスカッション

#### 「“地域”を舞台に子供を育てる～地域の担い手へのメッセージ」



第二部は、杉並区立第一小学校の放課後子供教室(放課後の居場所)「すぎっ子くらぶ」の企画、運営を担う伴野博美さん、北区立なでしこ小学校の放課後子供教室でコーディネーター

をされている大川文子さん、地域の青少年の体験活動をサポートしている日本青年奉仕協会研究員の村上徹也さんをパネラーに、御自身も「きてきて先生プロジェクト」という学校支援活動に取り組まれているフリーアナウンサーの香月よう子さんをコーディネーターに迎え、パネルディスカッションが行われました。

このパネルディスカッションでは、地域のボランティアで運営されている放課後子供教室の場において、「群れで遊べない」といわれている子供たちが自然と異年齢での遊びができるようになってきたり、高学年が挨拶をする姿をみて、低学年が真似をするという、縦の関係ができてきていると

いう話などがありました。昔は別な形で存在していた、学校でも家庭でもない、子供が育つ空間の役割を放課後子供教室が担うようになってきているという意見も出されました。

このパネルディスカッションのまとめでは、多様な出会いの場、異年齢、異なる職業の人たちが、子供と一緒に学び、学ぶことを活かしていくことで、子供たちの育つ場が豊かになるということ、また、こうした取り組みの場を拓くための新しいリーダー像として、コーディネーターの存在が必要だということが提案されました。

